

○●○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○ 〈第8回〉 ○●○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○

佛教圖書館協會研修會
講演・講義録

平成15年9月26日(金)～27日(土)

立正大学

2003

目次	
第8回佛教図書館協会研修会日程	369
講義 立正大学図書館所蔵明代南蔵について	371
実演 古書修補のご紹介と基本方針	381
講義 日蓮自筆文書の継承と伝来	387
池上本門寺見学	395
霊寶殿見学	396
大坊本行寺見学	397
研修会出席者名簿	399

第8回 佛教図書館協会研修会 講演・講義録

平成16年3月31日 発行

当 番 校 立正大学図書館

第8回佛教図書館協会研修会日程

会場：立正大学大崎校舎 1号館4階 第7会議室(B)

第1日目 13:30～ 受付
 (9/26) 14:00～ 開会(司会進行 大崎図書課長 七森勝志)
 挨拶 立正大学大崎図書館長 石田孝造
 14:15～ 講義「立正大学図書館所蔵明代南蔵について」
 文学部史学科助教授 野沢佳美
 15:30～ 集合写真撮影・休憩
 16:00～ 実演「和装貴重古書補修の技術」
 (有)松本事務所代表 松本 弘氏
 佐藤洋一氏
 清水希子氏
 17:30～ 移動(大学→不動前 マイクロバス約15分)
 18:00～ 懇親会 割烹「水仙」(目蒲線不動前)
 20:00 第1日目終了

第2日目 9:30～ 受付
 (9/27) 9:45～ 講義「日蓮自筆文書の継承と伝来」
 仏教学部講師 高森大乘
 11:00～ 休憩
 11:15～ 図書館見学・展覧(日蓮大聖人の足跡を辿る)
 12:00～ 昼食・休憩
 12:45～ 移動(大崎広小路→池上)
 13:30～ 池上本門寺・本門寺霊寶殿・大坊見学
 14:45～ 移動(池上→大崎広小路)
 15:30～ 閉会挨拶 立正大学司書部長 高木 明
 全終了・解散

立正大学図書館所蔵明代南蔵について

(立正大学文学部) 野沢佳美

1. 歴史研究資料としての印刷大蔵経

- 1) 印刷大蔵経(漢文)開板の歴史→年表・系統図
- 2) 印刷大蔵経研究略史→『大蔵経関係研究文献目録』(野沢編、1993)
- 3) 歴史研究資料として
 - (1) 題記・刊記(施舎刊記)・補刻記→政治と仏教、仏教と民衆、文化伝播
 - (2) 刻工→書誌学(版本学)、出版文化史
 - (3) 字体・扉絵・角筆・音釈など→文化史、仏教美術史、国文学史、言語学

2. 明代における大蔵経編集

- 1) 南蔵; 洪武帝の勅命、板木は金陵(南京)報恩寺に保管、二つの南蔵
 - 2) 北蔵; 永楽帝の勅命、板木是北京宮中の漢経廠に保管、完成は正統5年
 - 3) 嘉興蔵; 明末の万暦~清初、方冊蔵、日本にも多く伝来、鉄眼版の版下
- ※近年、中国から『洪武南蔵』『永楽北蔵』が相継いで影印刊行される。

3. 立正大学図書館所蔵の南蔵について

- 1) わが国の現存状況→立正大学図書館・山口県快友寺・大谷大学図書館、個人?
- 2) 立正大学図書館蔵本の現存状況→『立正大学図書館所蔵明代南蔵目録』(1989)
 - (1) 現存数; 268部558帖
 - (2) 印造年; 万暦18(1590)年
 - (3) 請経者; 山西潞安府長治県在住の趙継先とその一族、法住寺へ施入

4. 立正大学図書館蔵本から判明した事項

1) ふたつの南蔵問題

《洪武南蔵》

明代刻造の三個官版中最初版本。又名《初刻南蔵》。明洪武五年(一三七二)勅令于金陵(今江蘇南京)蔣山寺開始点校、洪武三十一年刻完。全蔵六七八函、千字文編次天字至魚字、一六〇〇部、七〇〇〇多卷。永楽六年(一四〇八)遭火焚毀。保留下来的唯一印本、直到一九三四年才在四川省崇慶県上古寺中發現、已略有殘欠、并雜有部分補抄本和坊刻本在內。

《永楽南蔵》

為明永楽年間据《洪武南蔵》的重刻本、編次有所改動。経版五七一六〇塊。全蔵六三六函、千字文編次天字至石字、一六〇一部、六三三一卷。経版蔵于報恩寺、由南京礼部祠祭清吏司主管批准、供全国各地寺院請印、平均每年約刷印二〇蔵、所以流伝の印本較多。該蔵雖系根据《洪武南蔵》重刻、但書写和鏤刻都不及《洪武南蔵》工整。

(『中国大百科全書(宗教)』、中国大百科全書出版社、北京、1988)

※「洪武南蔵」の板木を利用して再編集たものが「永楽南蔵」（改編は永楽14・15年ごろ）

根拠(1)；「洪武南蔵」の続蔵が永楽12年末ごろ完成したとの「識語」

●『古尊宿語録』巻第21の巻末・浄戒の識語→正蔵部が永楽6年ごろ焼失？

根拠(2)；「永楽南蔵」（正蔵部）を再刻したのなら短時間過ぎる。

永楽6年？焼失 同10～15年再刻 同17年完成

根拠(3)；立正大学図書館所蔵「永楽南蔵」中の刻工

●元末から明初に活動した刻工

王保・黄保・陳厚・陳魯・潘晋・楊保・朱祖・徐成・李成・李和・陳七・高山甫・芦顥・陳文・
林伯福・黄還朗・王安・王全・黄道正・呉五・子得・薛志良・楊成・林伯福・何宗大・孫成・
貝公亮・孟起宗

2) 南蔵と南京の經鋪問題

(1) 經鋪（仏書専門の民間出版業者）→北宋時代から出現。

南宋以降、杭州・南京・北京などに集中。

(2) 南蔵の印造を南京經鋪が担当→中国歴代印刷大蔵經に例なし。

(3) 立正大学図書館蔵本中の5つの南京經鋪→徐後山、徐龍山、徐雲泉、周鋪、曾鋪

※嘉靖年間末から万暦年間前半にかけて、複数の經鋪が協同印造体制をとっていた。

↓

ひとつの經鋪に特定の仏典が集中しないように配慮されている。

(4) 經鋪の出版活動状況→仏書以外の書籍を出版 ← 立正大学図書館蔵本の裏打ち

(5) 多数の印記の存在→經鋪の印造過程をうかがう資料？

3) 南蔵の函数・巻数問題

(1) 立正本の刊記→万暦18年、638函

(2) 完成当時→永楽17年、635函

(3) 「南蔵目錄」→万暦年間後半、636函

→明代を通じて一定していない

5. 今後の印刷大蔵經研究の課題

1) 歴代大蔵經の現存状況の把握→とくに中国での調査・報告への期待。

2) 影印本出版における諸問題→近年、中国から各種の大蔵經影印本が出版。

『洪武南蔵』『永楽北蔵』『龍蔵』『中華大蔵經』など

↓

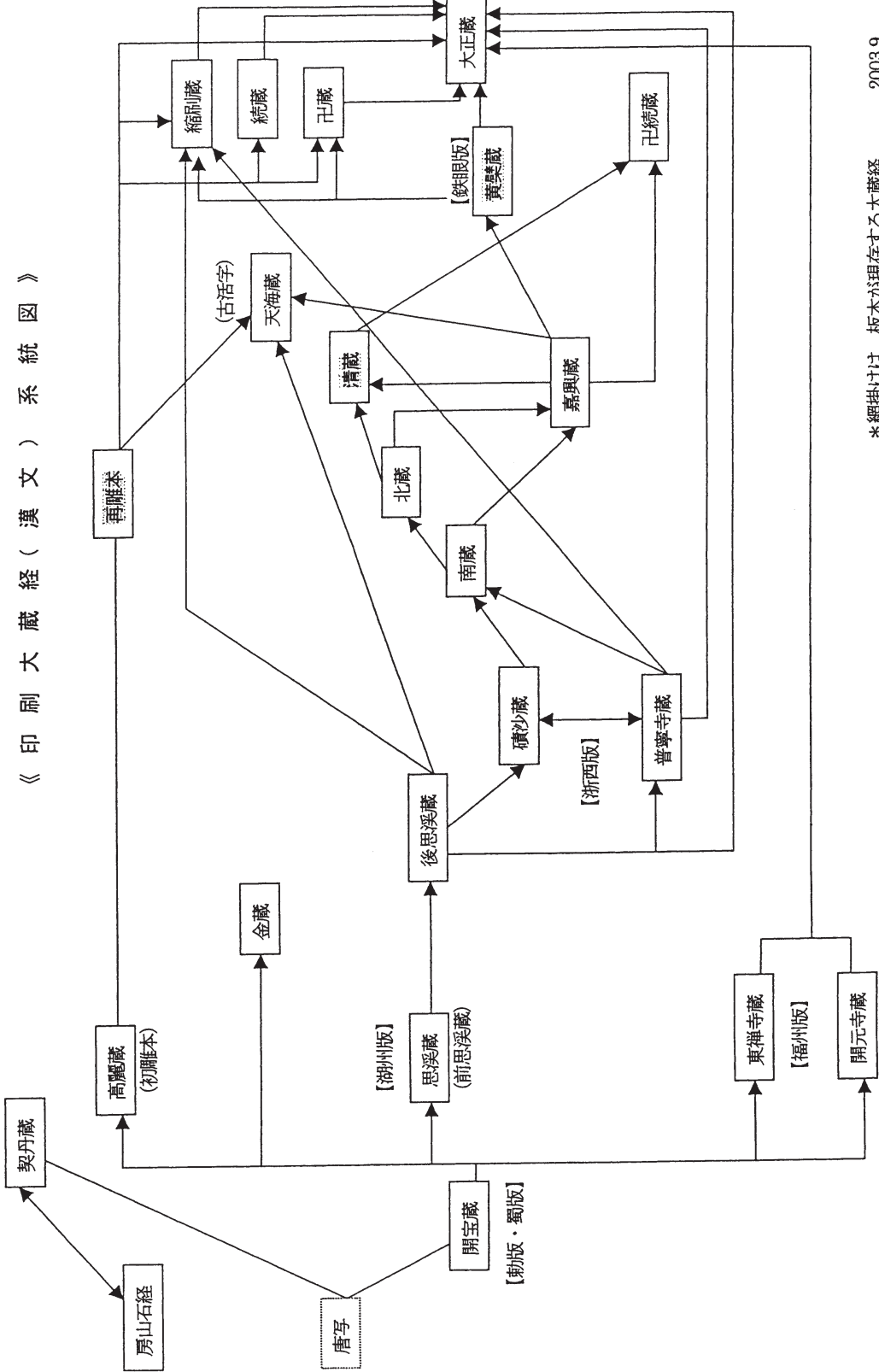
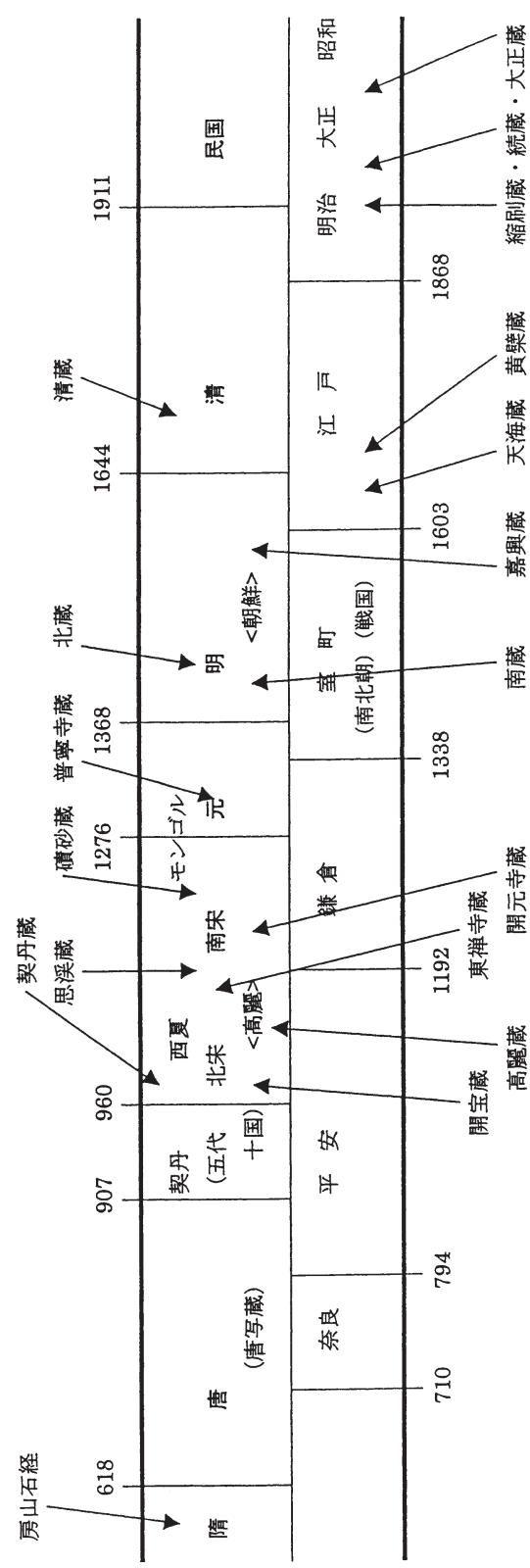
必ずしも“忠実な”影印ではない。

3) 国際的な総合的研究の必要性→日本・中国・台湾・韓国等の各分野の研究者による。

↓

情報交換・総合学術調査・共同研究など

B.C. 770		B.C.221		A.D.25		280		589	
【中国】 (朝鮮)	殷 周 (西周)	(春秋・戦国)	(東周)	秦 漢 (新)		三国 (魏・呉・蜀)		晋 (北魏 北齊・北周) 南北朝 (宋・齊・梁・陳)	
【日本】	縄文			弥生			(邪馬台国)		
							飛鳥		



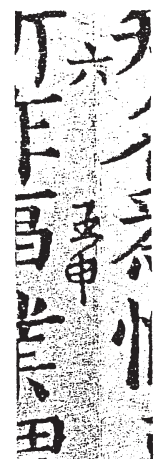
* 網掛けは、板木が現存する大蔵経 2003.9.



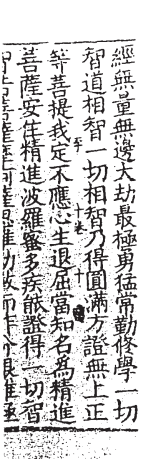
②「林盛」という施工名の下に「刀」という字を付す



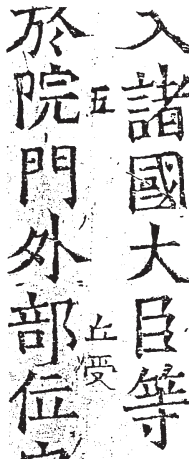
③横書きの刻工名（「羊中」）



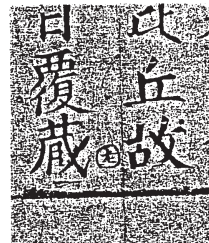
④行書風にかかれた刻工名



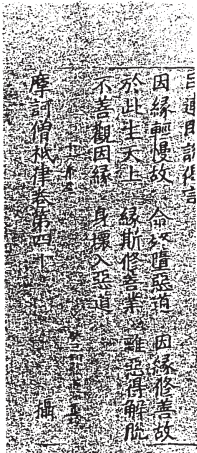
⑤刻まれなかった刻工名



⑥刻工名（「丘受」）



⑦〇で囲まれた刻工名



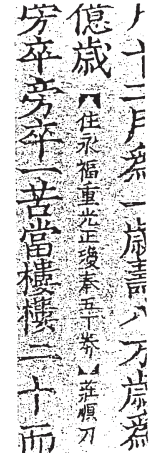
⑧道深という人物による重校（重刊）記



⑨版心の具体例「千字文・巻数・施財記」



⑩自身の平安を祈った女性による施財記



⑪魚尾と「五十巻」という具体的な金額のあった施財記



⑫版木にうつす經典を書写した人物を示す



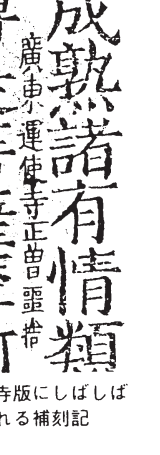
⑬女性による施財記



⑭版木5枚分の施財記



⑮東禪寺版にしばしばみられる補刻記



⑯東禪寺版にしばしばみられる補刻記



「宋版（思存版）大般若經」（岩蔵寺蔵）巻百六十九後表紙 角端による文字と絵の書き入れ

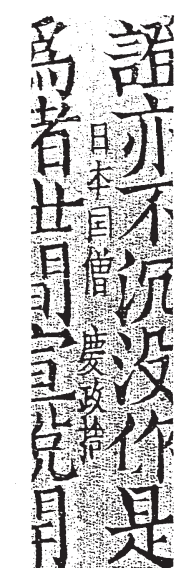
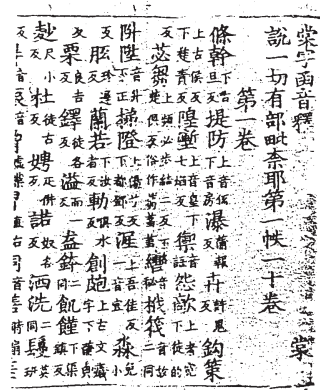
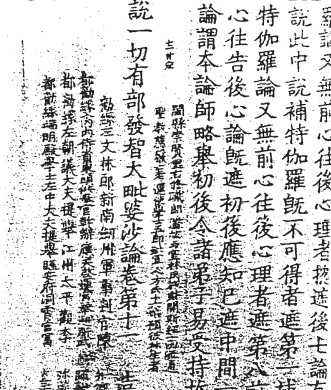


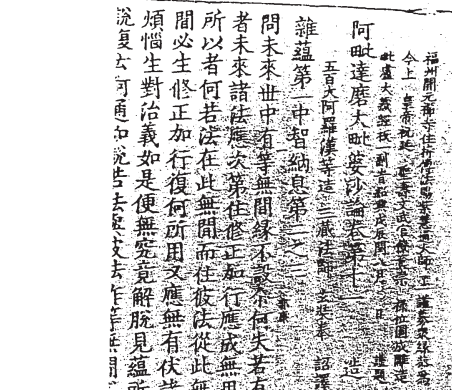
図1 馬経



⑰別帖に仕立てられた音釈



⑱經典の巻末。巻末施財記・經典名・千字文・勸縁記



⑲經典の巻頭。題記・經典名・千字文・訳経者



図7 経鋪E（龍山）



図6 経鋪D（徐雲泉）



図5 経鋪C（徐龍山）



図4 経鋪B（徐後山）



図3 経鋪A（徐後山）

経鋪	印	記
A B	b, e, f, m,	
C	a, b, c, f, g, k, m, p,	
D	a, b, c, g, i,	
E	a, b, c, g, i, l,	
F	a, g, h, i, m, n,	

a	類聖寺（經一・三・五・七・九・十一・十三・十五・十七・十九・二十一・二十三・二十五・二十七・二十九・三十一・三十三・三十五・三十七・三十九・四十一・四十三・四十五・四十七・四十九・五十一・五十三・五十五・五十七・五十九・六十一・六十三・六十五・六十七・六十九・七十一・七十三・七十五・七十七・七十九・八十一・八十三・八十五・八十七・八十九・九十一・九十三・九十五・九十七・九十九・一百）
b	尹東泉記（經一・三・五・七・九・十一・十三・十五・十七・十九・二十一・二十三・二十五・二十七・二十九・三十一・三十三・三十五・三十七・三十九・四十一・四十三・四十五・四十七・四十九・五十一・五十三・五十五・五十七・五十九・六十一・六十三・六十五・六十七・六十九・七十一・七十三・七十五・七十七・七十九・八十一・八十三・八十五・八十七・八十九・九十一・九十三・九十五・九十七・九十九・一百）
c	寬山（經一・三・五・七・九・十一・十三・十五・十七・十九・二十一・二十三・二十五・二十七・二十九・三十一・三十三・三十五・三十七・三十九・四十一・四十三・四十五・四十七・四十九・五十一・五十三・五十五・五十七・五十九・六十一・六十三・六十五・六十七・六十九・七十一・七十三・七十五・七十七・七十九・八十一・八十三・八十五・八十七・八十九・九十一・九十三・九十五・九十七・九十九・一百）
d	清流寺（經一・三・五・七・九・十一・十三・十五・十七・十九・二十一・二十三・二十五・二十七・二十九・三十一・三十三・三十五・三十七・三十九・四十一・四十三・四十五・四十七・四十九・五十一・五十三・五十五・五十七・五十九・六十一・六十三・六十五・六十七・六十九・七十一・七十三・七十五・七十七・七十九・八十一・八十三・八十五・八十七・八十九・九十一・九十三・九十五・九十七・九十九・一百）
e	平原郡（經一・三・五・七・九・十一・十三・十五・十七・十九・二十一・二十三・二十五・二十七・二十九・三十一・三十三・三十五・三十七・三十九・四十一・四十三・四十五・四十七・四十九・五十一・五十三・五十五・五十七・五十九・六十一・六十三・六十五・六十七・六十九・七十一・七十三・七十五・七十七・七十九・八十一・八十三・八十五・八十七・八十九・九十一・九十三・九十五・九十七・九十九・一百）
f	朝陽寺（經一・三・五・七・九・十一・十三・十五・十七・十九・二十一・二十三・二十五・二十七・二十九・三十一・三十三・三十五・三十七・三十九・四十一・四十三・四十五・四十七・四十九・五十一・五十三・五十五・五十七・五十九・六十一・六十三・六十五・六十七・六十九・七十一・七十三・七十五・七十七・七十九・八十一・八十三・八十五・八十七・八十九・九十一・九十三・九十五・九十七・九十九・一百）
g	法華寺（經一・三・五・七・九・十一・十三・十五・十七・十九・二十一・二十三・二十五・二十七・二十九・三十一・三十三・三十五・三十七・三十九・四十一・四十三・四十五・四十七・四十九・五十一・五十三・五十五・五十七・五十九・六十一・六十三・六十五・六十七・六十九・七十一・七十三・七十五・七十七・七十九・八十一・八十三・八十五・八十七・八十九・九十一・九十三・九十五・九十七・九十九・一百）
h	觀音寺（經一・三・五・七・九・十一・十三・十五・十七・十九・二十一・二十三・二十五・二十七・二十九・三十一・三十三・三十五・三十七・三十九・四十一・四十三・四十五・四十七・四十九・五十一・五十三・五十五・五十七・五十九・六十一・六十三・六十五・六十七・六十九・七十一・七十三・七十五・七十七・七十九・八十一・八十三・八十五・八十七・八十九・九十一・九十三・九十五・九十七・九十九・一百）
i	四寺（經一・三・五・七・九・十一・十三・十五・十七・十九・二十一・二十三・二十五・二十七・二十九・三十一・三十三・三十五・三十七・三十九・四十一・四十三・四十五・四十七・四十九・五十一・五十三・五十五・五十七・五十九・六十一・六十三・六十五・六十七・六十九・七十一・七十三・七十五・七十七・七十九・八十一・八十三・八十五・八十七・八十九・九十一・九十三・九十五・九十七・九十九・一百）
j	保安寺（經一・三・五・七・九・十一・十三・十五・十七・十九・二十一・二十三・二十五・二十七・二十九・三十一・三十三・三十五・三十七・三十九・四十一・四十三・四十五・四十七・四十九・五十一・五十三・五十五・五十七・五十九・六十一・六十三・六十五・六十七・六十九・七十一・七十三・七十五・七十七・七十九・八十一・八十三・八十五・八十七・八十九・九十一・九十三・九十五・九十七・九十九・一百）
k	閻闍寺（經一・三・五・七・九・十一・十三・十五・十七・十九・二十一・二十三・二十五・二十七・二十九・三十一・三十三・三十五・三十七・三十九・四十一・四十三・四十五・四十七・四十九・五十一・五十三・五十五・五十七・五十九・六十一・六十三・六十五・六十七・六十九・七十一・七十三・七十五・七十七・七十九・八十一・八十三・八十五・八十七・八十九・九十一・九十三・九十五・九十七・九十九・一百）
l	古雄天／軍寺造（經一・三・五・七・九・十一・十三・十五・十七・十九・二十一・二十三・二十五・二十七・二十九・三十一・三十三・三十五・三十七・三十九・四十一・四十三・四十五・四十七・四十九・五十一・五十三・五十五・五十七・五十九・六十一・六十三・六十五・六十七・六十九・七十一・七十三・七十五・七十七・七十九・八十一・八十三・八十五・八十七・八十九・九十一・九十三・九十五・九十七・九十九・一百）
m	徐氏廟／經閣記（經一・三・五・七・九・十一・十三・十五・十七・十九・二十一・二十三・二十五・二十七・二十九・三十一・三十三・三十五・三十七・三十九・四十一・四十三・四十五・四十七・四十九・五十一・五十三・五十五・五十七・五十九・六十一・六十三・六十五・六十七・六十九・七十一・七十三・七十五・七十七・七十九・八十一・八十三・八十五・八十七・八十九・九十一・九十三・九十五・九十七・九十九・一百）
n	庚寅定業／敬聖右造（經一・三・五・七・九・十一・十三・十五・十七・十九・二十一・二十三・二十五・二十七・二十九・三十一・三十三・三十五・三十七・三十九・四十一・四十三・四十五・四十七・四十九・五十一・五十三・五十五・五十七・五十九・六十一・六十三・六十五・六十七・六十九・七十一・七十三・七十五・七十七・七十九・八十一・八十三・八十五・八十七・八十九・九十一・九十三・九十五・九十七・九十九・一百）
o	華口記（經一・三・五・七・九・十一・十三・十五・十七・十九・二十一・二十三・二十五・二十七・二十九・三十一・三十三・三十五・三十七・三十九・四十一・四十三・四十五・四十七・四十九・五十一・五十三・五十五・五十七・五十九・六十一・六十三・六十五・六十七・六十九・七十一・七十三・七十五・七十七・七十九・八十一・八十三・八十五・八十七・八十九・九十一・九十三・九十五・九十七・九十九・一百）
p	關空／界益（經一・三・五・七・九・十一・十三・十五・十七・十九・二十一・二十三・二十五・二十七・二十九・三十一・三十三・三十五・三十七・三十九・四十一・四十三・四十五・四十七・四十九・五十一・五十三・五十五・五十七・五十九・六十一・六十三・六十五・六十七・六十九・七十一・七十三・七十五・七十七・七十九・八十一・八十三・八十五・八十七・八十九・九十一・九十三・九十五・九十七・九十九・一百）

大衆經般若部	(1~19)	E
寶積部	(20~53)	
大集部	(54~77)	
華嚴部	(78~104)	
涅槃部	(105~111)	
五大部外重訳経	(112~392)	C B C
華嚴經	(393~533)	F F
小衆経阿含経	(534~687)	F F F
華嚴經	(688~775)	F F F
宋元入藏諸大小衆経	(776~1074)	F F F
西土聖賢撰集	(1075~1224)	F F
大衆律	(1225~1249)	
小衆律	(1250~1307)	
大衆論	(1308~1397)	C C C
小衆論	(1398~1434)	D
續入藏諸論	(1435~1457)	D
此方撰述	(1458~1610)	D D D D D D D D D D C

F	南京聚宝門西廊外徐雲泉印
E	南京聚宝門西廊外徐雲泉印
D	南京聚宝門西廊外徐雲泉印
C	南京聚宝門西廊外徐雲泉印
B	南京聚宝門西廊外徐雲泉印
A	南京聚宝門西廊外徐雲泉印



図9 刊記



図8 経鋪F（曾南）

八年上章乞歸故山大明二年春僖宗遣難西書肩輿詔赴行在帝接谷田令汝與諸達官問令諸學士撰玄師號皆蘇州府天宮寺定山判補朕以開示悟入法華之也悟達大道悟佛知見悟河沙劫所以悟者真賜悟達國師為號雖曰讓不遂乃乞歸九隴舊卧内見所曾遊歷聖境

図10 版心に見えぬ補刻者例 1

一切中復有一切重重無藏性圓融無盡以真如性切法即真如故一切時處頌云若人欲識真空理身與非情共一體處處皆同即見空此即真如含一切一一念劫收一切於一境中諸境界只用一念觀諸會時處帝網現重重一切者水之旋流回伏之處一三難渡故法海旋伏亦然

図11 同 2

天	石	野	出	入	出	入
六三九	六三六	六三七	六三八	六三九	六四〇	六四一
大般若經卷多経	大般若經卷多経	大般若經卷多経	大般若經卷多経	大般若經卷多経	大般若經卷多経	大般若經卷多経

宣徳9年 嘉靖39~41年 嘉靖44年 万曆18年	聚宝門姜家來賓樓 聚宝門外徐政印行 南京聚宝門外第二牌樓邊師姑巷裏經房徐坊景家印行 南京聚宝門裡三坊巷口經房徐後山印行 南京聚宝門裡皇殿廊經房徐後山印 南京聚宝門外報恩寺前徐龍山印 南京聚宝門外徐雲泉印 聚宝門裏西廊周鋪印行 双橋門裏會甫印行 經鋪徐程錦・徐自強 南京聚宝門裡三山街西南廊經鋪徐一登印行 江南水西門裏三山街口往南一家經房胡君質鋪 江南水西門裏三山街口往南一家經房胡公美 南京聚宝門雨花台經房孟洪字印行 聚宝門外徐用和經坊印行
万曆34~35年 万曆40年代？ 順治年間	
(不明) (不明)	

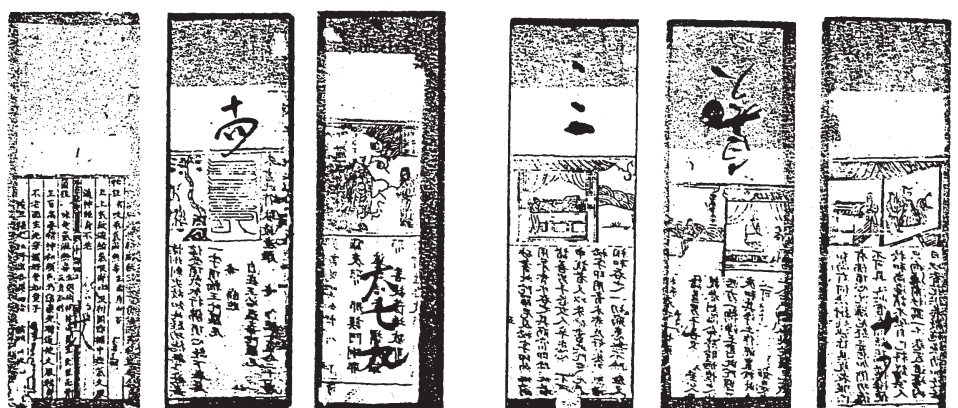
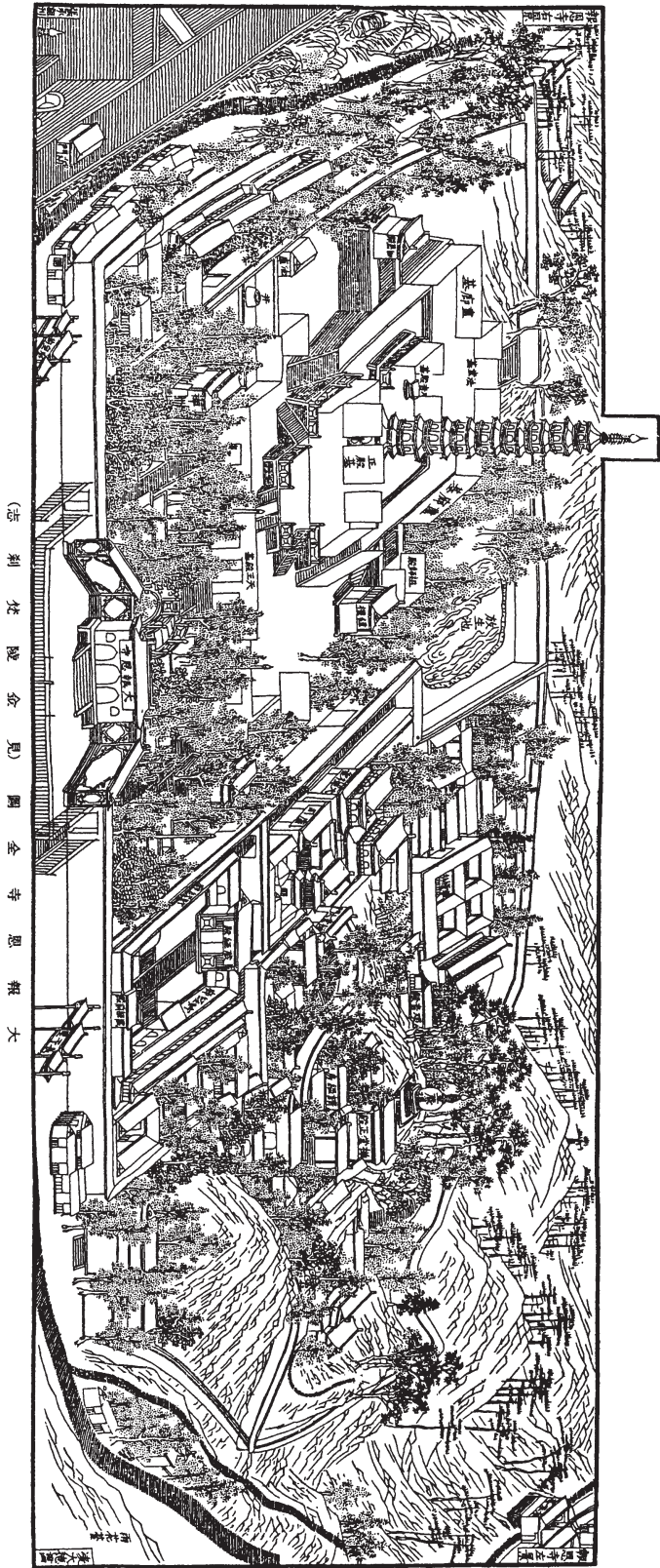
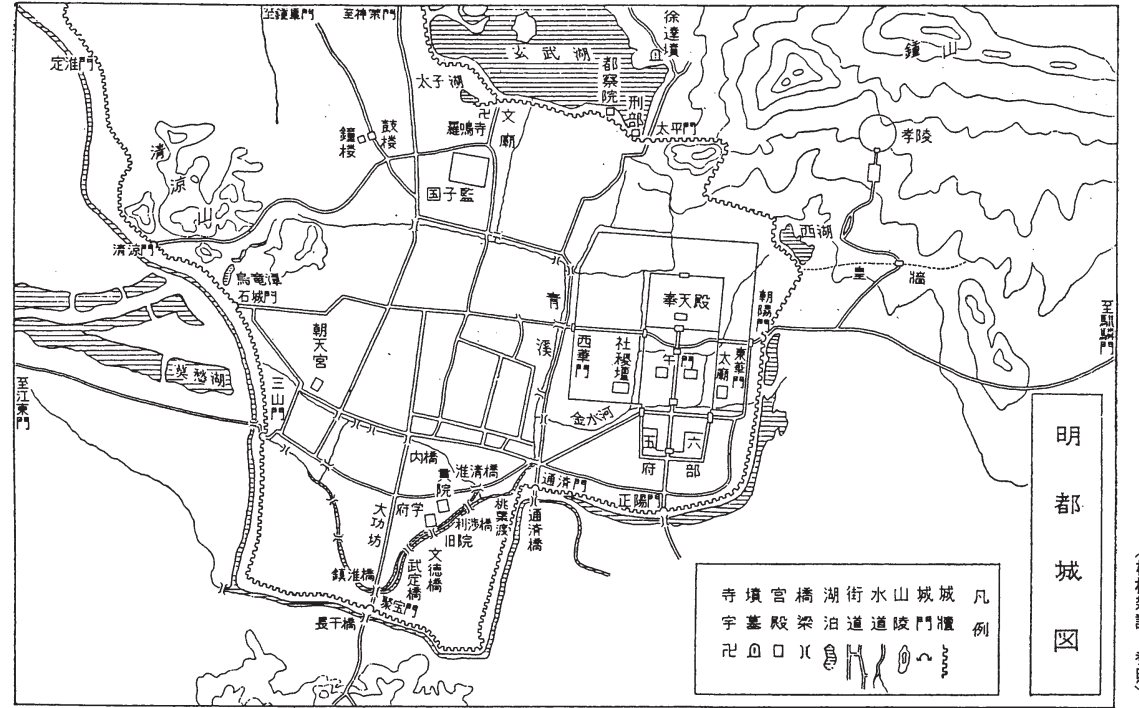


図19 同 2

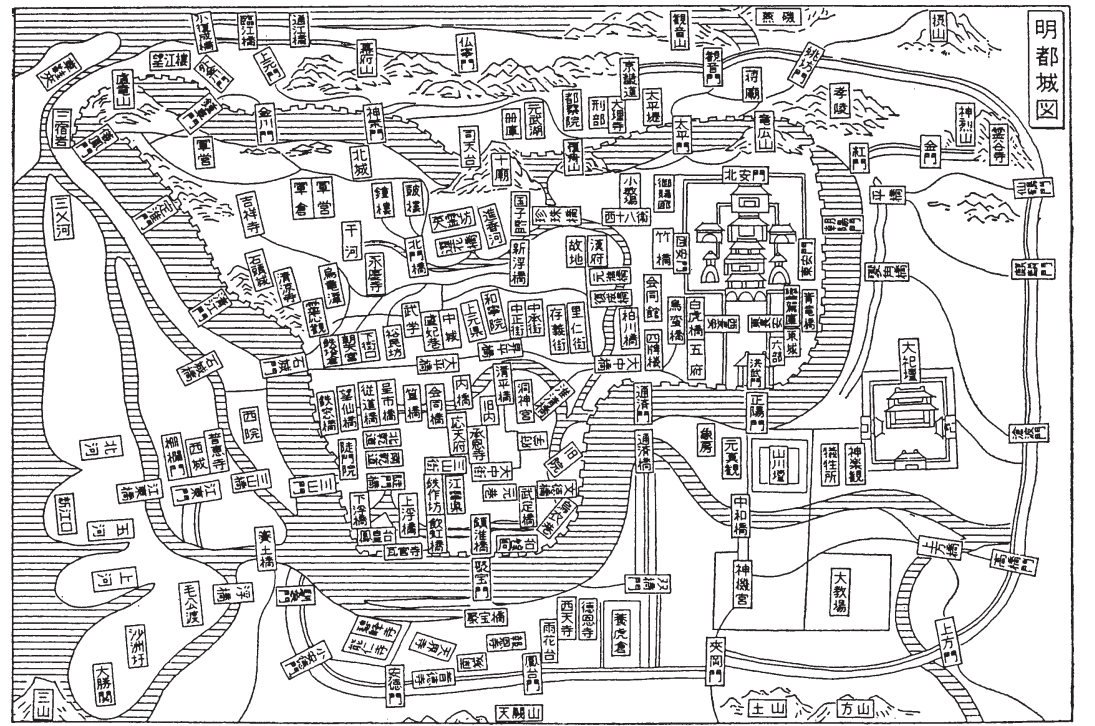
図18 表紙の裏打ちに使用された他の書写例 1



(志) 利 兌 陵 金 見 圖 全 寺 恩 報 大



(板橋雜記 參照)



(板橋雜記 參照)

古書修補のご紹介と基本方針

松本研究室 松本 弘

松本研究室として30年来、和漢の古文書（室町）、近世文書（江戸・明治）を中心とした文書全般の修補を手がけて参りました。文書形態は、代表的な四つ目綴じから折り本、卷子本、粘葉装、大和綴じ等の和装本に始まり、古筆切、番付、地図等の一枚物まで、和紙資料を中心に扱っております。

修補の際にまず留意しなければいけないのは、更なる修補に備えて手を加えるということです。材料は主に水、澱粉糊、ミョウバン、柿渋など副作用の心配のない自然素材を用い糊は再び剥がせることを前提に使用しています。

芸術品の修復と異なるのは、どこが欠損していたかわかるように直すことで欠損文字は加筆などせず、裏打ち紙などを染めたりもしません。小口を揃え見た目を美しくするための、原本裁断も避けなければなりません。このような修補を施された古書を結構目にしますが、これでは修補を重ねる度に原本が小さくなってしまい、文字内容が失われる危険があるからです。資料として丈夫で読みやすく仕立てることと、可能な限り原型をとどめようとする事、その判断と調整が難しいところです。

現在全世界的に書物は様々な危機にさらされており、洋紙における中性紙問題の他にも電算化を押し進める中、ともすれば原本の持つ重要性が軽視されがちではないでしょうか。

一時図書館ではマイクロをとりさえすれば安心という風潮があり撮影のために本の綴じをほどくことが多かったようですが、本の構造をよく知らないで綴じ直せなかったり、かえって本を壊してしまい結局ばらしたまま、閲覧できない状態で保管されるといった事態も起こりました。ひどい例ではマイクロにとった後、原本を廃棄したこともあったようです。

研究者もいろいろで、内容さえわかれば複製で良いという内容重視の方もいらっしゃいますが、複製と原本では実際に手にとった時の情報量が違います。製本様式や、本紙の紙質、修補跡の有無や、繕い紙にある書き込み等原本からしか伝わらない情報が沢山あるはずです。

活字本に翻刻されていても、原本が木版であったり古活字版であったりすると感じられる趣もちがってきます。虫よけに銀杏葉をはさんで使用していたこと、赤く染めた和紙を嘗めて本紙に張り付けると付箋紙として使えることなど、内容とは直接関係の無さそうなこともおもしろい発見となります。

今ではマイクロは100年もたないというのが定説ですが、和紙なら何百年と持ちこたえ、今なお支障のないことが実証されている訳です。

和紙はたいへん柔軟な強靱さを持つ素材で、虫損でレース状になったものや、鼠の糞尿で固まったもの、水害で膨張したり黴で柔らかく老けたもの等でも適切な修補を施せば、さらにこの先何百年と保存して行くことが可能なのです。

明治以降、日本の文化に対しての考え方が変わり、古くて汚いものが疎まれ何でも新しいものを良しとする風潮が広まりましたが本に対しても少なからず、そういった考えによる対処が行われたように思います。とりかえしのつかない「修補」を施された例も多く、例えば化学糊やセロテープの跡は二度と元には戻りませんし、和本を立てて整理するためだけに、厚紙の表紙を取り付け、開きが悪く読めない本になっているものもありました。

本の形態、内容がわかって初めて、本当の意味での図書館における管理・保存が出来るのかもしれない。

修補の仕事は毎日の地味な作業の積み重ねですが、単なる技術の問題にとどまらず本来司書・学芸員の資格を有する者が、書誌学の知識に基づいて為されるべきものと考えています。時代性、内容価値に即した修補を検討模索することが大切です。現在修補室を置いている図書館は稀ですが、そのような可能性が模索されていた時代もあったようです。

修補の仕事は専用の場所があって、道具が揃っていて、じっくり腰を据えて行えるのが理想です。職人の技術は元来、秘技・秘伝的な捉え方が根強く、公開されづらい側面がありましたが一人の職人が一生の内に手掛ける事が出来るのは、極一部の本だけです。今回の実演を通して、多くの方に興味を持っていただければと願っております。

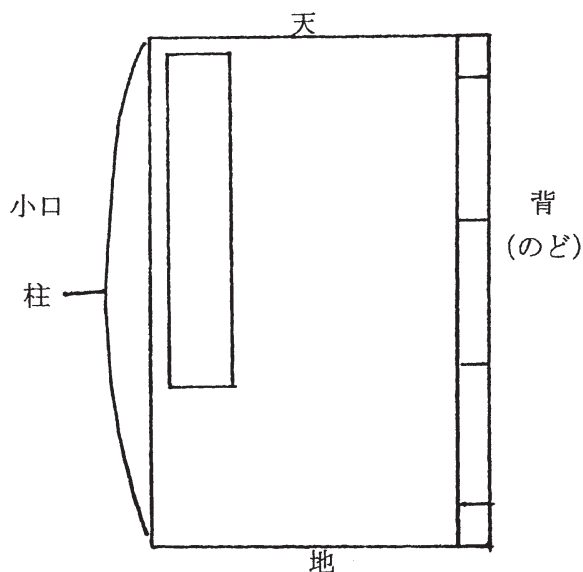
実演

和装本の修補（虫損穴埋め）

- 1 修補の最初に大切なのは、本の現状の正確なデータを残しておくことです。
現在はデジタルカメラという便利なものがありますから利用するのもいいかもしれません。
丁の間に覚え書きや付箋などはさまっていれば、ひとつずつ別に保管します。この時どこのページにあったかを明記しておきます。
修補中に不明になりそうな事は皆控えておきます。
- 2 綴じ糸を切って解体していきます。
こよりで中綴じしてあるものは、はずします。
丁数を数えて、目立たない場所に鉛筆でナンバーをふります。
組本でしたら1-1、1-2、のように通し番号を入れます。
虫損部分や端が折れている箇所はぬるいアイロンをかけておきます。
- 3 綴じ穴周辺は虫損も多いため、その糞などで汚れているので掃除しながら進めていきます。
- 4 下準備が整ったら糊の濃さを調整します。
アイロンの熱で初めて付く程度の薄目に仕上げます。
- 5 本紙をアイロン台（家庭用銀布張りのもの）に裏面を上にな一枚広げ虫損部分の上に繕い紙をのせ、水を含ませた細目の筆で欠損の形に沿って、3ミリほど大きめになぞっていきます。
- 6 濡らした部分が透けて見えるので、その線に直角になるようにひっぱりながら、形をつくって切りはなします。
和紙の繊維を放射線状に伸ばすような気持ちでちぎります。
- 7 出来た紙片の裏に薄く糊を塗り、ピンセットで虫損の上に置いたら軽く馴染ませ、アイロンで糊を乾かします。
水分が飛ぶ前にアイロンを動かすと、皺になるので気をつけます。
ここは感じがつかめるまで、予備の紙で試した方が良いでしょう。
- 8 柱やのど部分の欠損が激しい場合は、天から地まで一枚の短冊状の繕い紙で補強します。
和紙にスチール定規をあて、水筆で一直線になぞり同じように繊維を出すように、ひっぱり切って切りはなします。
- 9 修補済みの本紙からはみだした繕い紙は、本紙ぎりぎりをカッターで切り、元通り折り目をつけ、角を揃えたら、数時間プレスします。
堅い木板2枚の間にはさみ、大きめの辞典などを重石にします。

10 製本は出来るだけ元の針穴を利用します。

本紙と表紙はこよりの中綴じで固定しますので、糸綴じはあまり締め付ける必要はありません。最後にもう一度プレスして出来上がりとなります。



※参考

和装本	適当なものがなければ、古書店で廉価な端本など求める。 これは修補用の繕い紙にも使用できる。		
生麩糊など澱粉糊	粉から炊くもの以外では、無香料で化学保存料添加の少ない物		
和紙	繊維の長い本楮、未晒しの薄目		
糸	本の大きさに準じた太さの絹糸		
道具類	目打ち（千枚通）	ピンセット（先の細いもの）	カッター
	30センチ定規	針 鋏	糊刷毛 等

上記商品の大体のものは東急ハンズの製本コーナー他で入手可能
専門店は以下の通りです。

小津和紙博物館	日本橋本町 2 - 6 - 3	3663-8788
町田糸店	台東区駒形 1 - 1 - 1	3844-2171
製本工房リーブル	文京区本郷 1 - 4 - 7 協和ビル 3 F	3814-6069
（こちらでは教室などもあり、購入に際してもアドバイスが受けられるようです。）		



松 本 研 究 室

156-0057

東京都世田谷区上北沢 5-22-2

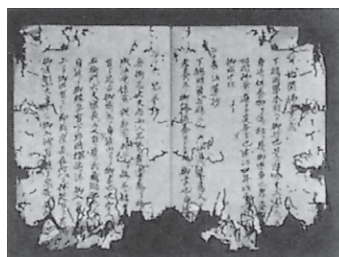
Tel 03(3306)0214



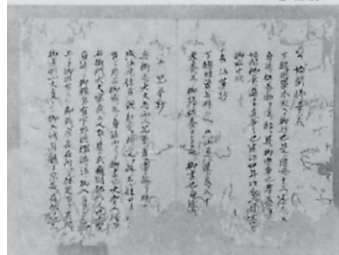
松本 弘昭

早稲田大学第一文学部東洋史学専修 昭和36年3月
同大学院文学部研究科史学専修修士課程卒業 昭和38年3月
宮内庁書院部の書庫官 渡藤謙之輔氏に
氏の没年まで製本、古書修補技術の
指導を受ける 昭和38年から昭和53年まで

向、当研究室は元芝学園中学校理事長・校長、
元大正大学理事長である父、松本徳明により
昭和41年に創設されたが、引退により
昭和47年松本弘が引き継ぎ、
製本、古書修補部門を新設し今日に至る



修 補 前



修 補 後

Matsumoto Book Restoration Institute

We are engaged in mending of books in general (books bound in Japanese style, folded books, rolled books), specializing in Japanese and Chinese, modern (Edo, Meiji) and ancient (Muromachi) books.

We rebound books by changing covers, mend ragged books by filling wormholes and lining mildewed pages one by one, and restore books as far as possible whose pages stick to each other damaged by water or bookworms.

We believe that the highest priority should be given to protection of the value of books as materials for study, and that it is meaningless to mend books only for better appearances.

- 修補の基本方針
- 一、製本形態は原本通りに行います。
司書、学芸員の資格を有する者が、原本の時代性、製本様式、紙質等を見分け検討し、内容価値に即した修補を行います。
 - 一、裏打ち紙には本ころの未晒し（美濃紙）を用います。
故意に裏打ち紙を原本に合わせて染めることはしません。
抜け落ちた部分、虫喰いで失くなった部分がかかるように
裏打ち紙は原本と区別できる未晒しの白を使用します。
 - 一、原本の三方断裁は行いません。
文字の損失で、原本が小さくなるのを防ぎます。
 - 一、自然材料（水、澱粉糊、ミョウバン等）を用います。
副作用がなく、再度の修補に耐えるよう備えます。

Mending Principles

1. Application of the same binding style as that of original texts. Staff members who are qualified as librarian or curator examine and judge age, binding style and paper quality of the books, and mend them in accordance with their features and quality.
2. Usage of unbleached paper mulberries (Mino Paper) for guards. Guards are not dyed the same color as the original texts. Usage of unbleached white guards distinguishable from the original texts to clarify there are missing pages and wormed and lost pages.

2. No edges of original texts are cut so that losses of letters and downizing of the original texts can be avoided.

4. Application of natural materials (water, starch, alum and so forth) which are free from harmful aftereffects and enable books to be mended repetitively.

「日蓮自筆文書の継承と伝来」

立正大学仏教学部講師・日蓮教学研究所研究員 高森 大乘

於、仏教図書館協会研修会

平成一五年九月二七日、立正大学大崎校舎第七会議室

① 日蓮



鎌倉中期の僧。日蓮宗（法華宗）の開祖。生歿年は、承久四年（一二二二）二月一六日（伝）弘安五年（一二八二）一〇月一三日。幼名は善日磨・薬王丸。房号は是聖房と名乗った時もある。諡は立正大師。生まれは安房国小湊（現、千葉県）。

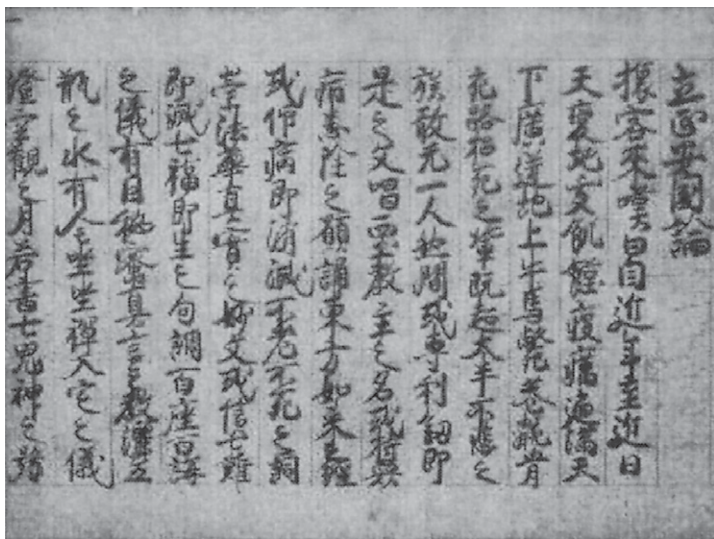
一二歳の頃から安房の天台宗系寺院清澄寺で初等教育を受け、一六歳で出家、鎌倉・京畿の諸寺に遊学。建長五年（一二五三）四月二八日、清澄寺で法華信仰を表明（立教開宗）、浄土教を批判したため同寺を追放され、相模国鎌倉で布教を開始。文応元年（一二六〇）七月一六日、法華信仰勸奨と念仏信仰禁圧を提言する『立正安国論』を執筆し、前執権北条時頼に提示するが、翌年弘長元年（一二六一）五月一二日、捕らえられて伊豆国伊東へ流刑。弘長三年（一二六三）、流罪を赦免されてからも、法華信仰を主軸とした諸宗批判と幕政

批判を続ける。文永八年（一二七二）九月二日、幕府は日蓮と門弟の言動を反社会的運動として弾圧。日蓮は相模国竜口での斬首の危難を免れ、佐渡国へ配流。配流中、信仰と思想の深化を『開目抄』『如来滅後五百歳始観心本尊抄』に表す。文永十一年（一二七四）に赦免されてからは、甲斐国身延山に入山、著作活動と門弟教育に専念する。弘安五年（一二八二）、病のため身延を下山し、武蔵国池上の池上宗仲邸で、後事を日昭・日朗・日興・日向・日頂・日持ら直弟六人（六老僧）に託して歿した。

貞応元年（一二二二）	1	安房国小湊に誕生（父 貫名重忠・母 梅菊）。
天福元年（一二三三）	12	清澄寺入山、道善房に師事する。
嘉禎三年（一二三七）	16	出家、是聖房と名乗る。
暦仁元年（一二三八）	17	鎌倉遊学。
仁治三年（一二四二）	21	京畿遊学。
建長五年（一二五三）	32	四月二八日、立教開宗。この頃から日蓮と名乗る。
文応元年（一二六〇）	39	七月一六日、『立正安国論』を述作し、前執権北条時頼に上呈。
弘長元年（一二六一）	40	八月二七日、鎌倉の草庵を夜襲される。…松葉谷法難
弘長三年（一二六三）	42	五月二日、伊豆国伊東へ流罪。…伊豆法難
文永元年（一二六四）	43	二月二日、伊豆流罪を赦免。
文永八年（一二七一）	50	一月二日、安房国長狭郡で東条景信に襲撃される。…小松原法難
文永九年（一二七二）	51	九月二日、佐渡流罪決定、一三日、鎌倉片瀬龍口で斬首を免る。…龍口法難
文永一〇年（一二七三）	52	一〇月一〇日、相模依智を發ち、二八日、佐渡に到着。
文永十一年（一二七四）	53	一月、佐渡塚原で念仏者と問答（塚原問答）。
建治元年（一二七五）	54	二月、『開目抄』を述作。同月、京都で二月騒動（北条時輔の乱）おこる。
建治二年（一二七六）	55	四月二五日、『如来滅後五百歳始観心本尊抄』を述作。
建治三年（一二七七）	56	二月一四日、佐渡流罪を赦免。三月一三日、佐渡出発、三月二六日、鎌倉帰還。
弘安二年（一二七九）	58	四月八日、平頼綱と面談（第三国諫）。五月二二日、鎌倉を發ち、一七日、身延入山。
弘安四年（一二八一）	60	一〇月五日、文永の役勃発。
弘安五年（一二八二）	61	六月、『撰時抄』を述作。
		七月二二日、『報恩抄』を述作。
		六月、門弟の三位房日行・四条頼基らが龍象房と問答（桑ヶ谷問答）。
		八、一〇月、駿河方面の門弟に弾圧が及ぶ（熱原法難）。
		六月、弘安の役勃発。
		九月八日、身延下山、一八日、武蔵国池上邸に到着。一〇月一三日、同地にて入滅。

②『立正安国論』（千葉法華経寺蔵、国宝）

『立正安国論』。真蹟は千葉中山法華経寺の聖教殿に所蔵されている。本紙は、界線を引いた罫紙を使用する。日蓮が本書をしたためたのは文応元年（一二六〇）であるが、オリジナルは北条時頼に提出してしまったので現存しないとされる。ただ、日蓮は常に『立正安国論』の下書を所持して、しばしばこれを書写・複製・改訂している。『昭和定本日蓮聖人遺文』所収の中山法華経寺本もそのうちのひとつで、文永六年（一二六九）二月八日に完成したものである。『立正安国論』は全三種の存在が確認され、別本は身延山久遠寺にもかつてあったが明治八年（一八七五）の大火で焼失、京都本圀寺には『立正安国論（広本）』（建治・弘安の交）が現存する。このように、日蓮は、本書をことのほか重視していたようである。中山本は千葉氏の矢木胤家の依頼を受けて書写したものであったが、日蓮歿後の一三世紀末、心ない弟子によって、当時の武士の教養書とされた『本朝文粹』を書写するための紙として使用されてしまう。一七世紀初頭に功德院日通によって、『本朝文粹』の全文が、ハケに水を含ませて徹底的に消去するという方法で消されたと伝えられる。



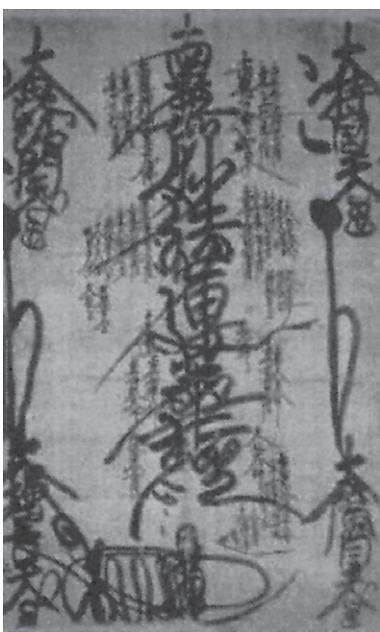
③日蓮自筆文書について

日蓮の書き遺した文章類を総称して、「日蓮遺文」あるいは単に「遺文」と呼んでいる。宗門では、古来より「御書」「祖書」「聖教」「御妙判」などの呼称で呼ばれてきた。

遺文は、その内容から、大別して、著作・書状・図録・書写本（親写本）・要文・書入本などに分けられる。著作とは、日蓮が撰述・述作した教義書の類である。日蓮の手になる大部の著作のうち、『立正安国論』『開目抄』『如来滅後五五百歳始観心本尊抄』を「三大部」、これに『撰時抄』『報恩抄』を加えたものを「五大部」などと呼ぶ。他に『法華取要抄』『四信五品鈔』なども五大部に準ずる重要教義書として位置づけられている。書状とは、日蓮が当時の門弟（弟子・檀越）に充てた手紙・書簡の類である。『兄弟鈔』『下山御消息』などがある。なお、書状の中には『曾谷入道殿許御書』などのように、五大部に準ずる重要教義が記されたものもあり、著作と書状を厳密に区別することが難しい例もある。図録とは、日蓮が門弟との法門談義の際などにおいて図示したものと考えられている、図版の類である。『一代五時鶏図』『和漢王代記』などがある。書写本（親写本）とは、日蓮自ら経巻・書物等を書写した写本である。『授決円多羅義集唐決』『五輪九字妙秘密義釈』『貞観政要』などがある。要文とは、日蓮が各種の経論釈疏等から必要に応じて摘要を抜き書きしたものである。『依憑天台集要文』や『法華玄義要文』などがある。書入本とは、日蓮が経論釈疏の類に書き入れをおこなったものである。『注法華経』『秘蔵宝鑰』がある。

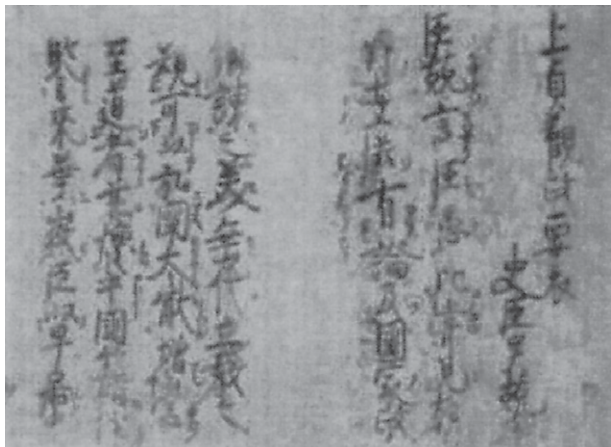
以上の分類をもとに、現存する真蹟遺文についてその概数を挙げると、著作・書状で完全に伝存するものは一二三点、断片の存在するものは八七点、図録で完全に伝存するものは二一点、断片の存在するものは二九点が確認されており、そのほか遺文の断簡が現存するものは三五七点、要文断片は一四〇点、書写本は二三点を数える。このほかにも、日蓮自筆文書の一類として、大曼荼羅が一二七幅が伝わるが、文章である遺文と、信仰の対象となる本尊とは一線を画するものとして把握されている。

日蓮筆『大曼荼羅』

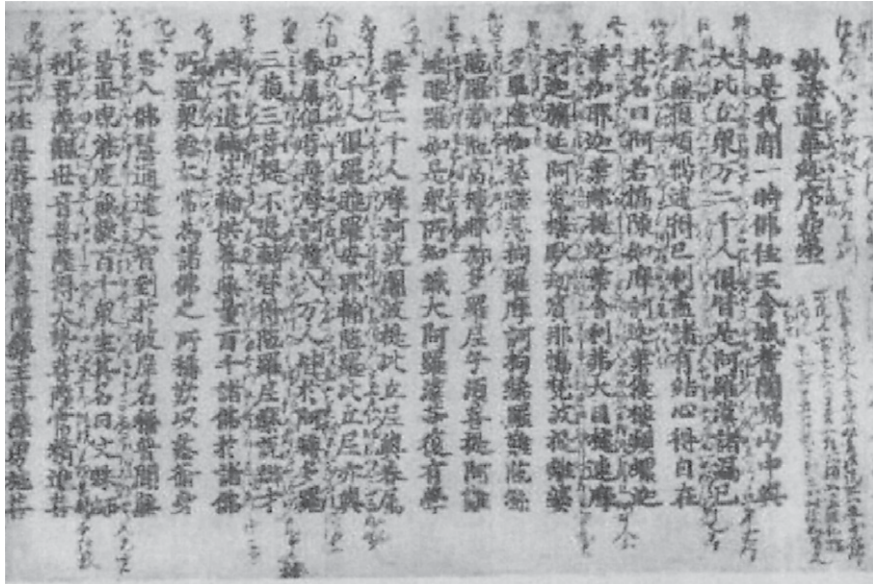


神奈川比企谷妙本寺蔵。弘安三年（一二八〇）三月。一〇紙継。縦一六一・五cm、横一〇一・七cm。日蓮が池上入滅に臨んで床頭に奉懸したところから、臨滅度時本尊とも呼ばれる。近年の修復作業により紙裏に日朗の記名が確認され本図が、六老僧の日朗に分与されたことが明らかとなった。

日蓮書写『貞観政要』

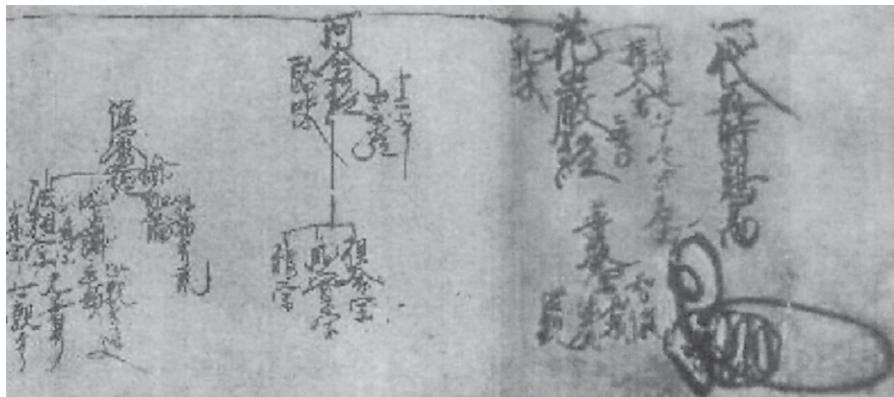


『私集最要文注法華經』（静岡妙法華寺蔵）

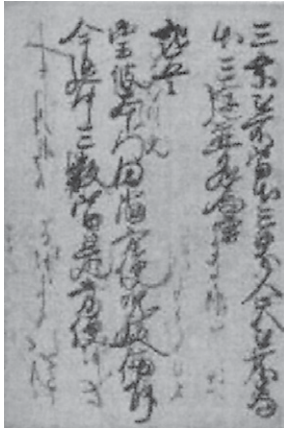


日蓮注。全一〇巻。『注法華經』
『注經』などとも略称す。真蹟
は静岡三島妙法華寺蔵。日蓮所
持の法華三部經（『無量義經』一
卷・『妙法蓮華經』八卷・『觀普
賢菩薩行法經』一卷）で、經文
の本文行間、天地、紙背に二二
〇六章にも及ぶおびただしい量
の經文・論疏などの要文の引用
・書き入れが行われている。な
お、日蓮が所持したこの法華三
部經は、春日版系統に属する
法華版經（法華經の版本）を底本
としているものと推測される

『一代五時鷄圖』（京都本圀寺蔵）

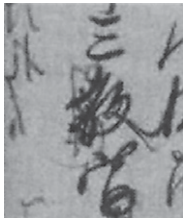
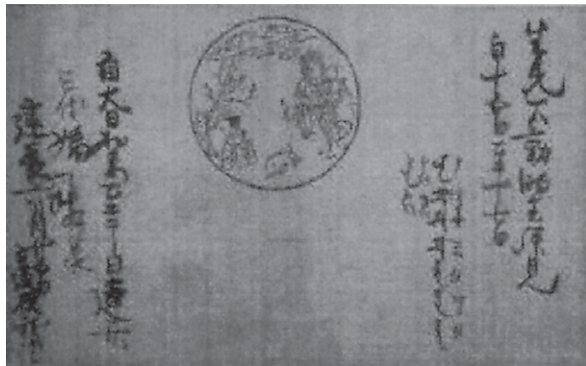
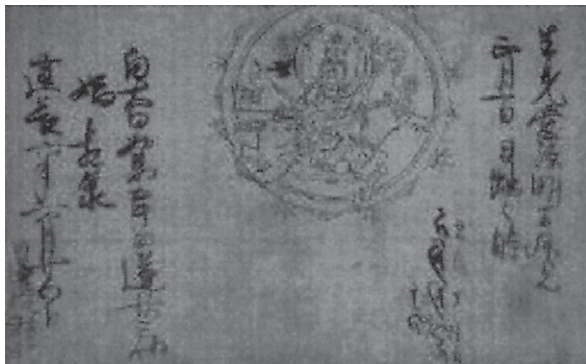


『天台肝要文集』（千葉法華經寺蔵）



日蓮遺文『富木殿御返事』の
反故裏を利用して、日蓮自ら
天台章疏の要文抜き書きを行
ったもの。本文「三教」の部
分の紙背に『富木殿御返事』
の日蓮の署名が確認できる。

『不動愛染感見記』（千葉保田妙本寺蔵、重文）



⑤ 富木常忍（日常）



富木常忍（一二一六―一二九九）

富木常忍は、下総国若宮在住の日蓮の有力檀越。幕府の御家人であり、房総半島を席巻した豪族千葉氏に仕えた家臣でもあった。同じく千葉氏に仕えた下総中山在住のおおたじようみょう大田乗明や下総曾谷在住の曾谷教信らとともに、早くから日蓮を外護し、日蓮からその同心ぶりを賞賛されている。なかでも特に、富木常忍は、日蓮の立教開宗当初からの檀越であったことが知られ、日蓮歿後は、日蓮の著作や書状を蒐集・格護し、今日その多くが中山法華經寺の聖教殿に保管され、信仰の対象となるのみならず、日蓮研究に貴重な資料を提供している。

早い時期から日蓮と富木常忍の親交があったことは、日蓮の初期遺文『富木殿御返事』（『昭和定本日蓮聖人遺文』一五頁）の存在からも容易に推察できる。本書には、立教開宗後、ほどなくして日蓮が富木氏の許を往来していたことをほのめかす記述がみえる。

なお、本書の反故裏に、日蓮の筆になる「天台肝要文集」の要文抄出が見られる。富木常忍は、自らの許に届いた書状

や千葉氏との間で交わした文書などを集め、その裏面の白紙部分を再利用してもらったために日蓮に提供したと考えられている。本書は、日蓮が富木常忍に充てた書簡を、富木常忍が日蓮に再利用してもらったために返したもので、日蓮がその後（文永年間頃か）、『富木殿御返事』の反故裏を利用して「天台肝要文集」を書き入れたものと推察されている。

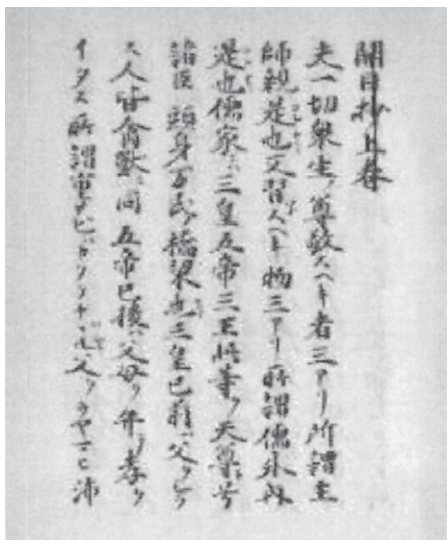
⑤ 日蓮自筆文書の継承と伝来

今日、我々が目にすることのできる遺文の伝存形態には、大別して、真蹟遺文・写本遺文・刊本遺文の三種がある。真蹟遺文とは、日蓮の直筆・真筆が現存するものである。代表的なものに『立正安国論』や『如来滅後五百歳始観心本尊抄』などがある。

写本遺文とは、日蓮の門弟が日蓮の書とされるものを書き写したもので、これには、かつて日蓮の直筆が存在（曾存）したが現在は失われ、門弟らによって書写されたもののみが伝わる場合と、真蹟の存否が確認されていないが古来より日蓮の遺文と信じられ、門弟らによって書写されてきたものが伝わる場合とがある。真蹟がかつて存在したことが確認されている遺文としては、『開目抄』などがあり、真蹟が伝わらず写本のみによって復元されている遺文としては、『聖愚問答鈔』『三大秘法稟承事』などがある。

やがて中世から近世にかけて、日蓮を渴仰する門弟たちによって、日蓮の真蹟遺文や写本遺文を蒐集・書写した遺文集の類が編纂されるようになる。これには写本『録内御書』や写本『録外御書』などと呼ばれるものがある。

ついで、主に近世以降に宗門内外において、日蓮遺文を影印化・活字化して印刷・版行した刊本遺文が登場する。古くは刊本録内・録外、明治以降では『高祖遺文録』『日蓮聖人御遺文』『昭和定本日蓮聖人遺文』等が版行されている。



寂照院日乾写本『開目抄』

日蓮の遺文の写真版を公刊したものに、日蓮聖人真蹟集成法蔵館編集部編『日蓮聖人真蹟集成』全一〇巻（法蔵館、昭和五二年）がある。本書には、『昭和定本日蓮聖人遺文』未収録の要文断簡類も計一九三点、および『注法華経』全巻表裏面の写真が収められている。

また、日蓮自筆の大曼荼羅を蒐集したものに、片岡随喜編『日蓮大聖人御真蹟』第一部「御本尊集」（立正安国会）、山中喜八編『御本尊集』『御本尊集目録』（立正安国会）があり、特に後者は、現在までに確認されている大曼荼羅の写真を公開し、目録においてそれらすべての系年、讃文、授与書、添書、寸法、所蔵、由来などを記録している。今日、日蓮染筆大曼荼羅の全容は、これらの書によって知ることができる。

⑥ 『昭和定本日蓮聖人遺文』

『昭和定本日蓮聖人遺文』は、加藤文雅編『日蓮聖人御遺文（縮刷遺文）』（霊艮閣、明治三五年）を底本として、昭和二七―三四年に亘り、望月敏厚・鈴木一成らによって編纂された。現存の真蹟ならびに古写本・刊本などと対照・校合し、著作年代や真偽を勘えて、「正篇」「統篇」「断簡」「断簡」「断簡」「断簡」の五輯に分けて、編年体に配列したものである。現在は、平成一二年に改訂増補がなされ、全四巻が刊行されている。

第一・二巻には、日蓮の真蹟あるいは真蹟として扱われてきた著作・書状のなかで、ほぼ完全に全体像が復元できるものが収められ、これを「正篇」と呼んでいる。建長五年の『富木殿御返事』から弘安五年の『波木井殿御返事』までの四三四篇が、編年体で収載されている。第三巻は、古来より日蓮の書と言われてきたが現在は疑問視されている五五篇が「統篇」として収められ、また日蓮が法門談義等に用いたとされる「図録」三〇編、遺文の断片が現存するものの全体像がはっきりしない「断簡」一九八篇、日蓮の講義を門弟（日興・日向）が記録したといわれる「講記」二篇が収録される。また、併せて、真蹟・録内録外写本等の「目録」の類が収められている。第四巻には、日蓮自身が経論疏を書写・所持していたものを収めた「親写本奥書」、一―三巻に漏れた新発見の遺文が収められる「正篇新加」「断簡新加」「図録新加」、全巻を通じた「索引」等が収載される。

なお、『昭和定本日蓮聖人遺文』は、全巻通し頁で一貫しているため、第一巻は一―九五七頁、第二巻が九五九―一九三三頁、第三巻が一九三五―二八七一頁、第四巻が二八七三頁以降となっている。

※ 『日蓮の肖像彫刻（東京池上本門寺蔵 木造日蓮坐像、重文）』は、中尾堯著『日蓮』（吉川弘文館『歴史文化ライブラリー』一三〇、平成一三年）より、『立正安国論』『大曼荼羅』『貞観政要』『不動愛染感見記』『天台肝要文集』『富木常忍（千葉日本寺蔵 木造富木日常坐像）』は、東京国立博物館編『大日蓮展』（産経新聞社、平成一四年）より、『注法華経』は、日蓮聖人真蹟集成法蔵館編集部編『日蓮聖人真蹟集成』第七巻（法蔵館、昭和五二年）より、『一代五時鶏図』は『日蓮聖人真蹟集成』（前掲）三巻より、『開目抄』は梅本鳳泰編『開目抄』（本山本満寺、昭和三九年）より、それぞれ転載。

池上本門寺見学



池上本門寺



大堂



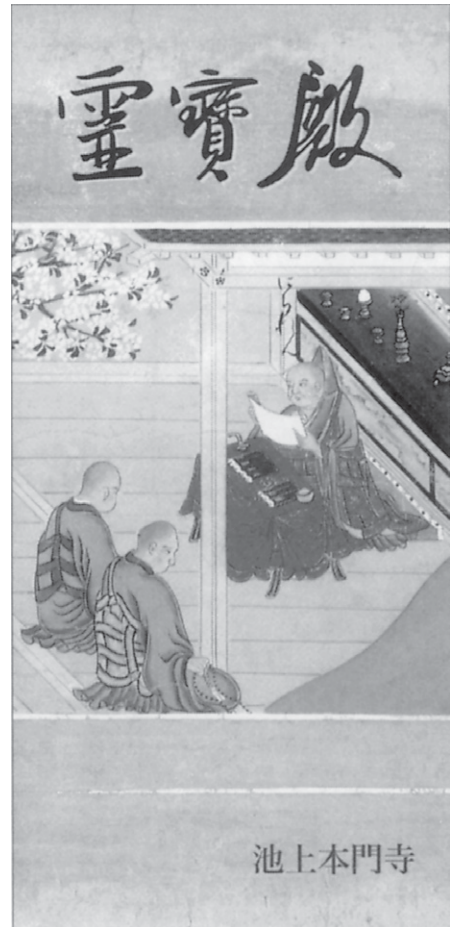
靈寶殿見学



靈寶殿は、池上本門寺に伝わる寺宝を保存し、展示公開する施設です。

池上本門寺の寺宝は、大きく2つに分けられます。「御靈宝」は、池上本門寺が開創されてから現在まで、約730年余りの間、伝えてきた文化遺産であり、日蓮聖人の大曼荼羅本尊や御消息をはじめ、歴代聖人の大曼荼羅本尊など、池上本門寺の歴史を物語る大切なものです。なかでも、日蓮聖人真筆『兄弟抄』は、池上宗仲、宗長兄弟に遣わされた御消息で、国の重要文化財に指定されています。

また、「兜木コレクション」は、法華經研究の第一人者で、立正大学名誉教授の故兜木正亨博士が収集された、1,000点以上におよぶ法華經研究資料です。このなかには日蓮聖人真筆『御所御返事』や日蓮聖人の伝記絵巻である『日蓮聖人註画讃』（桃山時代）、平安時代前期の写経で、贅美を尽くした『妙法蓮華經卷六』など、多くの貴重な文化遺産が含まれています。この「兜木コレクション」は、平成7年12月に本納寺住職桐谷征一師より、寄贈されたものです。



大坊本行寺見学



本堂



ご臨終の間



蘇生廟



第 8 回佛教図書館協会研修会出席者

担当校：立正大学図書館

No.	大 学 名	職 名	氏 名
1	愛知学院大学附属図書館	事 務 長	杉 原 良 爾
2	大谷大学図書館	図 書 ・ 博 物 館 課 長	金 厚 志
3	岐阜聖徳学園大学図書館	欠 席	
4	京都光華女子大学図書館	司 書	久 保 富 恵
5	京都女子大学図書館	課 員	廣 瀬 守 胤
6	京都文教大学図書館	情 報 図 書 課	大 浦 伸 子
7	高野山大学図書館	図 書 課 長	柳 川 瀬 政 子
8	駒澤大学図書館	参 考 係	中 山 紗 恵 子
		図 書 係	小 林 音 絵
9	淑徳大学附属図書館	千 葉 図 書 館 課 長 代 理	浅 岡 清 明
		主 任	光 富 真 理 子
		み ず ほ 台 図 書 館 主 任	栗 盛 牧 子
10	種智院大学図書館・学術情報センター	図書館・学術情報センター担当	盛 重 由 佳 理
11	相愛大学図書館	図 書 館 事 務 長	中 村 等
12	大正大学附属図書館	図 書 課 長	藤 原 勲
		課 員	宮 本 俊 澄
13	鶴見大学図書館	主 任	田 村 早 智
14	東海学園大学名古屋キャンパス図書館	主 査	堀 田 一
15	同朋学園大学部附属図書館	主 任	中 澤 章 浩
16	東洋大学附属図書館	課 長	日 野 知 子
		課 員	村 上 恭 子
17	花園大学情報センター（図書館）	図 書 館 情 報 課 課 長	後 藤 慶 裕
		図 書 館 情 報 課 係 長	福 島 丞
18	兵庫大学附属図書館	欠 席	
19	佛教大学図書館	浄 土 宗 文 献 室 課 長	藤 堂 祐 亨
		専 門 員	古 川 千 佳
20	身延山大学図書館	主 任 司 書	佐 野 賀 津 子
		図 書 係	沼 田 晃 佑
21	龍谷大学学術情報センター	事 務 部 長	寺 本 憲 夫
22	立正大学図書館	大 崎 図 書 館 長	石 田 孝 造
		司 書 部 長	高 木 明
		大 崎 図 書 課 長	七 森 勝 志
		課 員	水 上 裕 子